土屋武士JAF F4アドバイザーインタビュー

創造力と才能を磨く場として。

JAF F4 PADDOCK NEWS Vol.5

2021 FORMULA 4 CHAMPIONSHIP

国内唯一開発競争のある ミドルフォーミュラF4の魅力を探る

Text & Photo：大串 信（Makoto Ogushi）
Photo：酒井聖一（Seiichi Sakai）

「JAF F4はなくなっても構わないカテゴリーだと言う人がいると聞いて、驚いたんです。それで慌ててJAF F4のために何かできることがないかと、このポジションに就任させてもらいました」と言うのは、2021シーズン中にJAF F4アドバイザーとなった土屋武士だ。

JAF F4は国内独自のジュニアフォーミュラとして、2023年には創設30周年を迎える長寿カテゴリーである。しかしその後、FIA-F4やフォーミュラリージョナルなど、FIAの定める国際規格として同等のジュニアフォーミュラレースが制定され、国内でもシリーズ戦が開催されるようになり、一部のコースではレースカレンダーから押し出されそうになるなどの課題も生まれている。この状況を憂慮した土屋はJAF F4の存在意義を訴えるとともに、状況を改善するため志願してアドバイザーとなり、活動を開始した。

「JAF F4は、昔ながらの職人的レース屋さんが、大の大人でありながら、コレを作った、アレが壊れた、勝った負けたと本気を出して競争をする、いわばレースの魅力が凝縮している場なんです。ワンメイク化が進んだ近年、そういうカテゴリーは数少なくなっているので、このカテゴリーの存在意義は非常に大きいと考えています」

長年にわたり幅広く国内レースを眺め、ドライバーとして、エンジニアとして、チームオーナーとして、自らも第一線で戦ってきただけに、土屋は現在のJAF F4が置かれている立場もよく理解している。

「JAF F4の存在意義に対して懐疑的な考え方があるのも理解はできます。だけど、FIAの作った流れはお金を動かす人にとってのロジックになっていて、お金がないならレースをするなと言っているように聞こえます。純粋にドライビングを極めるためなら、ワンメイクもいいとは思います。でも、創意工夫で戦う職人はそこでは育ちません。職人のスピリットや技術を継承する場が少なくなっているいま、マルチメイクのJAF F4は継続していかなければいけないシリーズなんです」

JAF F4はクルマ作りの場であると同時に、多くの若いドライバーを育てる場としても機能してきた。F1で戦う角田裕毅をはじめ、国内トップカテゴリーの有力選手の多くがここで腕を磨いた。

ただ、若いドライバーが走るうえで大きな課題をJAF F4が抱えているのも事実だ。たとえば、HALOが義務づけられておらず、アルミモノコックの出走も可能なJAF F4車両がどれだけ安全性を確保できるのか、という問題だ。これについても土屋は考えていることがある。

「まずはハード面ではなく、ソフト面で対応していこうと考えています。必ずしもアルミだから危険でカーボンだから安全だというものではありません。それはレーシングカーを作っている職人たちは分かっています。それに、最近はクルマのハード的安全性は高まっていますが、そのぶん、頭のうえを飛んでいくような危険な事故がむしろ増えているように感じるんです」

近年は安全装備に囲まれたカーボンモノコックのシェルに座っている限り、深刻な負傷には至らないと過信したドライバーたちが無謀とも思えるドライビングをする傾向がある。土屋はまずその点を改善すべきだと言う。

「近年のF1など見ていても、ぶつかったら仕方がない、ぶつかってもクルマが安全に作られているから大丈夫だ、というようなレースになっているように感じます。これではダメなんです。たとえば一般道では、路面にただ1本の線が引いてあるだけで、本来非常に危険な対面通行が普通に成立しています。あれは意識の共有が徹底しているからなんだと思うんです。レースも一般道と同じで、越えたらダメな線をみんなで共有し、スポーツとしてお互いを尊重しながら競おうという意識を持つことが安全性を高めるためには重要なんです」

若いドライバーが経験を積むためのカテゴリーとしても機能しているJAF F4は、こうした基本的な姿勢を徹底させる場としても機能する必要があるだろう。

「それでも危険が完全に消えるわけではありません。いずれは、ハード面の安全性についても提案していきたいと思っています。時間もお金もかかることですから、熟慮して進めていこうと考えています」

JAF F4にはマルチメイクゆえの課題もある。まさにレース職人としてレース界と関わってきた土屋はこれについても状況を冷静に分析しており、課題を解決するだけではなく、レースがより活性化する方向で状況を改善していきたいと言う。

「いままでは台数を増やすための方針が最優先で、その結果、シリーズは盛況になってきましたが、この先は競争が激しくなっていくはずなので、性能の均一化を徹底する必要があります。『さすがだな』と思われるものはいいけど、『あれはズルいだろう』と思われるものはダメ。その線引きについてはみんなから意見を聞いて、アイデアを集めながら進められればと思います。これもドライバーと同じで、作り手も思いを共有することが大事です」

アドバイザーに就任した土屋はすでにレースの現場でさまざまな活動を始めている。志願してJAF F4のために働き始めた土屋は、今後についてこう抱負を語った。

「早速、シリーズに関わるエントラントやドライバーのみなさんと話をさせてもらい、すぐには無理だけど自分ができることは必ず少しずつでも良くしていくという約束をさせてもらいました。職人はわがままで扱いにくい方も多いんですが、なんとかまとめていきます。JAF F4は不要だという方とも、まだ世間話のかたちですが、今後はアドバイザーとしてわりと本気でやります、と話しました。おそらく、『面倒くさいヤツが来たなあ』と思われるんでしょうけど（笑）。ハードルや壁が多いのは事実。壊さないと先に進めないし、壊しすぎると誰かに迷惑がかかることもある。そういうことに留意しながら前に進んでいくつもりです」

11月21日（ワンデイイベント）に富士で開催された第10戦には、ジェントルマンクラスの9台を含む計20台がエントリー。土屋アドバイザーが話していたとおり、エントリー台数は回復傾向にある。（as）

アドバイザーとして、第10戦富士では精力的に各エントラントやドライバー、関係者から現状やリクエストなどを聞いて回った。ドライバー、エンジニア、チームオーナーと、さまざまな立場を経験してきた土屋氏。その手腕に期待がかかる。（as）

面倒くさいヤツと思われても できるところから活性化を図る

DUNLOP
F4選手権はダンロップタイヤの
ワンメイクレースです。
F4協会HP http://f4k.co.jp